

3. 寄稿：ミシュランに学ぶもう一つの道（全国ふるさと大使連絡会議代表 平谷英明）

外国人観光客用で日本語訳がないため意外と知られていないが、グルメガイドで有名なミシュランが観光ガイドを出している。

津軽の弘前城が星2つ、その近くの長勝寺が星3つといった具合である。

春は桜、秋は紅葉に包まれて美しい名城が星2つ、余り知られていない古刹が星3つというのも面白いと思い、数年前の晩秋に訪れてみた。

コロナ禍の前だったので、弘前城内は多くの観光客で溢れ、その多くが白い城壁と紅葉したモミジや黄落した銀杏との鮮やかなコントラストに魅せられているように思われた。

一方、長勝寺は、禅寺が並ぶ禅林街の奥にひっそりと立つ古色蒼然とした寺で、その日は私のほか、2人の観光客がただけで森閑としていたが、青森ヒバの三門、ミイラの棺などを拝観しているうちに渋い味わいが解ってきて、さすがミシュランの評価と妙に感心した記憶がある。

ミシュランでは、①現地訪問 ②独立性 ③選択 ④定期的更新 ⑤一貫した基準 をベースに評価しており、グルメガイドが権威あるガイドとなっているのと同様に、信頼できる観光ガイドとなっている。

翻って、わが国の場合、テレビや雑誌などグルメ番組、散歩番組、旅番組が花盛りで、世にグルメ評論家、旅行ジャーナリストなど数多いのに、日本人の手になる権威あるグルメガイド、観光ガイドがないのはどうしたことだろうか。

客観的であるべき評価に世間の評判、マスコミ受け、政治的配慮、忖度、思いやりなど余計なものが入り込み、厳格な評価ができないからと思われる。

政治的配慮、思いやりが入りすぎて厳格な評価に基づく客観的な選別ができないというのは、ある意味では日本人の優しさ、ファジーな良さとも言えるが、それが国の政策策定に現れると国の将来を過つこととなる。

平成初めの政策策定がその例で、バブルの余韻の残る微温的な雰囲気の中で、厳格な評価に基づく選別を避けて、大判振る舞いのバラまき行政を行ってしまった。

（1）リゾート法に基づく地域指定

当初3か所に絞る予定であったが、各自治体の熱意と政治の圧力に押されて申請があった43か所を認めてしまった。

その結果、全国各地にホテルとゴルフ場と温泉というワンパターンの平凡なリゾート地が群生することになってしまった。

歴史に if (もしも) は禁物であるが、もし仮に、当初の予定通り 3 か所に絞ってヒト・モノ・カネを集中投資していれば、30 年たった現在、突出した国際レベルのリゾート地ができ、ダボス国際会議のような権威ある国際会議も開催されるようになり、世界からセレブや最高級の頭脳や大金持ちが来ていたはずで---そうならば、令和のカジノ付きの I R 誘致騒動のような地域を分断する争いなどは生じなかったろうと思われる。

(2) ふるさと創生一億円事業

人口、財政規模、文化などの地域の差異を一切考慮せずに一律に当時 3,300 程あった市町村に一億円を交付してしまった、

その結果、一億円の使い道に困った市町村の中には、金塊を購入したり、懸賞を付けて架空の動物探しに奔走したり、豪華なイベントをしたり---話題性はあるが、着実な地域づくりとは縁の薄い政策に消費するところも出る始末であった。

もし、仮に、地域特性から将来の可能性を客観的に評価して地域を絞り込んで選別し、ヒト・モノ・カネを集中的に投資していれば、30 年たった現在、日本版シリコンバレー、日本版ザルツブルグなど個性豊かな地方が出来ていたかもしれないのに---と思われる。



合理的な政策で近代明治国家を築いた
伊達宗城



政治の圧力に屈せず法治主義を買った児島惟謙

この「厳密な評価と選別」口で言うのはたやすいが、現実の世界ではなかなか大変である。如何に公平な評価と選別を行ったつもりでも、選に漏れたところからは厳しい批判を受けるし、議会やマスコミへの説明も大変で、また選別したところとの関係を疑われることのないように高潔さを保たなければならないし---

その困難性は、長年、行政の場に身を置いた筆者には身に染みて分かっている。それでも「厳密な評価と選別」をしないと日本の再生はないと思っているので、数式やビッグデータを活用して厳密な評価を行い、それに基づいて合理的な政策を行うことができる EBPM (Evidence Based Policy Making) 手法の普及を各所で唱導しているところである。